

# 養護教諭志望学生が進路を変更するプロセスについて

中林 恭子・後藤多知子・舘英津子・渡辺千津子

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

Kyoko Nakabayashi · Tachiko Gotow · Etsuko Tachi · Chizuko Watanabe

*Division of Sciences, Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

## Abstract

This study examines the adjustment process of students in *yougo*-teacher program who decide not to pursue the career. Based on interviews with three such students, we analyzed their adjustment process to their career goal change on seven dimensions: ①commitment to becoming a *yougo* teacher; ②facing trouble; ③reaching a limit; ④resignation; ⑤decision on course change; ⑥grope for a new career course; and, ⑦decision on a new course. We can regard this process as confirmation and re-establishment of their identity as university students. In addition, the course change is found to have brought out an affirmative result in students' minds and thus can be considered a means of coping with stress. Faculty assistance is needed in leading students determine their career path based on their own will.

Key word : *yougo*-teacher, career goal change, identity

## はじめに

児童生徒の心身の健康問題が多様化、深刻化し、その解決が学校にも求められようになった。文部科学省は平成 21 年に学校保健安全法の一部改訂を行い、養護教諭を学校内で心身の健康に関して児童生徒の指導、保護者への助言を行う中心的存在として位置づけた。養護教諭の活躍の場が、広がることによって、養護教諭に憧れたり、その仕事に魅力を感じたりして、養護教諭を目指す学生も増加していると考えられる。また、学生、保護者の“手に職をつけたい”という資格取得の意欲が高まっており、その中で養護教諭免許を志望する傾向も見られる。

本学では平成 15 年に教職課程の認定を受け、養護教諭免許状を取得できるようになり、300 名以上の免許取得者を送り出してきた。しかし、養護教諭を目指して入学した学生の中には、さまざまな理由で免許状取得を断念したり、進路変更をした学生もいる。そのような学生を卒業へと指導していくことも、養護・保健コースの専任教員、教職担当教員（以下担当教員）や大学の責務であると考えられる。

進路変更に関して学生が悩んだり、迷ったりする時に、担当教員の援助が必要であろう。本学の学生の援助要請行動の調査によれば、「履修・進路」の悩みの相

談相手として、友人に次いでチューターや就職指導室等の教員が選択される傾向が見られた<sup>1)</sup>。このことから、教員による援助の重要性が示唆される。しかし、実際に担当教員として進路変更に関わる養護教諭志望学生にどのように関わればよいのか、どのような援助が可能なのか戸惑うことがある。学生にとっては一生の問題でもあり、慎重な対応が求められる、

大学生の進路変更については、山崎の最初に「なりたいたいもの」を選択してから卒業時に最終的に進路選択を行うまでの過程に関する研究<sup>2)</sup>、安藤の短大生の進路変更が就職の動機づけに与える影響についての研究<sup>3)</sup> 等がある。教員を目指す学生の進路変更に関しては、諸川等の初等教育学専攻の短大生の進路変更の契機に関する研究<sup>4)</sup>、森下の教育実習生の教職を「目指すプロセス」と「諦めるプロセス」に関する研究<sup>5)</sup> 等がある。また、大谷等が養護教諭志望学生の養護教諭志向に関する研究では在学中の志向の変更が研究している。<sup>6)</sup> 質問紙による統計的な研究がほとんどであり、質的な研究は十分行われていない。また、養護教諭を志望する学生の進路変更についての研究も行われていない。

進路変更をする学生を有効に援助するためには、学生が進路変更に至るプロセスを把握することが不可欠

である。本研究では、学生へのインタビューを通して、そのプロセスを検討する。進路変更のプロセスを分析すること自体に意義があるし、実践的にも有意義であると考えられる。

## 1 研究の目的

本研究では、学生が養護教諭を志望してから、進路変更へと至る過程についてインタビューを行い、その過程を分析することを目的としている。また、その過程で教員がどのように援助することが効果的であるか考察する。

## 2 研究方法

インタビュー対象と手続き

調査は養護教諭の志望を変更した本学の学生の中から、インタビュー調査を承諾した学生を対象とした。3名（以下、A、B、Cで表記）の学生は、全員3年生の女性である。

筆頭研究者が協力者に本研究の趣旨について確認書を用いて説明し、協力の了解を得た。また、協力者にはインタビューへの拒否権があること、拒否をしても不利にならないこと、プライバシーの保護を約束し、書面による同意書に署名してもらったうえでインタビューを実施した。

## 3 インタビューの構成

インタビューは筆頭研究者が、大学の研究室の学生指導用のスペースを使用して、1対1で約40分の面接を行った。インタビューの内容は下記の通りである。また、インタビューは半構成的面接方法で行った。内容によっては、関連する事項についても話を聞いた。インタビューを行ったのは、進路変更後、1年未満の時期である。

### (1) 志望動機

①養護教諭になりたいと思った時期、②きっかけ、③小、中、高等学校での保健室利用状況、④大学入学前の養護教諭のイメージ、⑤養護教諭を目指すことに対する家族の意見。

### (2) 大学生活

①大学生活について（授業、教員・友人関係、大学生活の満足度）、②大学以外の活動（アルバイト、ボランティア、他の活動）③養護教諭に関する授業について、興味の有無、養護教諭のイメージの変化。

### (3) 進路変更

①悩むようになった時期、②悩んだ理由、③相談の

有無、④相談した人は相談相手、⑤相談しなかった人はその理由、⑥進路変更を決意した時期、⑦進路変更を決意した理由、⑧進路変更に関する家族の意見

### (4) 進路変更後

①進路変更後の気持ち、②大学生活の変化の有無  
③友人関係の変化、④養護教諭イメージの変化、⑤大学生活の満足度

### (5) 新たな進路

①新たな進路の有無、②ある人はその進路を選んだ時期、③その進路を選んだ理由、④ない人は進路での悩み、⑤今後どのように進路を考えていくか。

## 4 結果

### (1) 志望動機

養護教諭になりたいと思った時期は、高校1年～3年であり、3名とも高校生の時期に進路を決定している。AとCは他に進路を考えており、それぞれ「養護教諭以外の教員」「パティシエ」を挙げている。

きっかけについては、B、Cは「中学、高校時代に養護教諭に悩みの相談に乗ってもらい、養護教諭に憧れた」と述べている。「高校時代が楽しかったので、先生になって母校に戻りたかった」というAも、「小、中学生の時に養護教諭に相談に乗ってもらったこと」を挙げている。

保健室の利用状況は、「小、中学校」、「高等学校」、「中、高等学校」と時期は異なるが、良く利用した時期が見られた。きっかけでも述べたが、「悩み、進路の相談」のよる利用であり、3名とも身体の不調による利用はほとんどなかったと言う。

入学前の養護教諭のイメージについて、Aは「相談しやすい先生」、Cは「受け入れてくれる力がすごく大きな存在」と、メンタル面でのケアを中心に養護教諭の「健康相談活動」に重きをおいている。養護教諭に相談したという体験を通して形成されたイメージだからであろう。一方、Bは「悩んでいる子の対応、相談。体調不良の子のケア」と心身両面のケアについてイメージしている。

家族は3名とも養護教諭になることに賛成して応援してくれたと言う。ただ、Aは「母親に看護師を勧められた」と述べている。

### (2) 大学生活

大学生活について、Aは「高校時代が楽しすぎたので、大学はあまり楽しくない」、Bは「高校と大学ではギャップがあり、大変だった」、Cは「1人暮らしに慣れるまでが大変だったし、ホームシックになっ

た」と否定的な傾向が語られた。

大学以外の活動では、3名ともアルバイトを行ったり、ボランティア活動に参加したりして、充実した日々を送っていたと述べている。

講義に関しては、Aは「養護の授業は楽しかったが、看護系の授業が難しく、実技もできなかった」、Bは「看護の授業はおもしろかったが、養護の授業、実技とも想像以上に変だった」、Cは「授業は楽しかった。やりがいもあった。ただ、やることが多すぎて変だった」と言う。興味のある授業はあったようだが、3名とも異口同音に授業、実技の変さを述べている。

### (3) 進路変更の悩み

進路変更で悩んだ時期は、Aは「1年の終わりから2年の初め」、Bは「2年の初め頃」、Cは「2年の終わり」と3名とも2年生の時に悩むようになったと述べている。

悩んだ理由としてAは「ボランティア活動を始めて子どもと接したが、仕事となると重いと感じた。命の重さというか。責任がとれない。私にはできないと思った。また、授業も難しくなり、自信をなくした」と述べている。養護教諭としての職責に耐えられないと感じたようだ。

Cは「本当に養護教諭になれるのかという不安があった。子どもと関わる上で自分自身に足りないものがある。教えることの難しさを痛感し、教師に向いていないのではないかと思うようになった。なぜ、養護教諭かと言われると、答えられない」と述べている。自分の適性について悩んだようだ。

Bは「毎日、大変で気持ちが揺れていた。これが続いたら、大学を辞めることになると思った。自分を追い詰めていたかもしれない。ただ、2年間でやり切った感じがして、いいやと思った」と述べている。

### (4) 相談相手

3名とも他者に相談しており、1人で悩んだり、抱え込むことはなかった。相談相手としては3名とも「友人」を揚げ、それぞれが「学生相談の先生」「チューター」「親」にも相談している。

担当教員に自発的に相談することには躊躇したようだ。その理由としては、Aは「養護の先生はすごいので、近寄りたかった」、Cは「(複数の教員がいるので)誰に相談すれば良いか分からなかった。自分の言葉で話すのが苦手なので、話すことが怖かった」と述べている。Bは「なぜだろう」と述べるにとどまり、理由は明かさなかった。

自発的に相談はしなかったが、教員が設定した面接

では話すことができた、3名とも述べている。

### (5) 進路変更の決断

決意をした時期についてAは「2年の終わり」、Bは「2年の春休み」、Cは「3年の開始前」と述べており、3年生になる前には進路変更を決断している。

その理由について、Aは「厳しくなったので、自分で決めた。いっぱい、いっぱい、ついていくのに死にそうだった。寝ないでやらないとついていけなかった」、Bは「無理だと思った。大学に行けなくなるのではと不安だった。自分で決断した」、Cは「親はできるから頑張りなど言っていた。その言葉を信じて頑張ってきた。でも、自分の頑張りには限界ではないかと思った。いっぱい、いっぱいだった。自分は精神的に弱いところがあるので、教師になったら、ストレスに耐えられるかとか考えた。母親に電話をし、ストレスへの不安とか話した。母は『はっきり言える人でないと先生にはなれないかな』と言ってくれたので、納得できた」とそれぞれ理由を述べている。

AとBは自分で決断したが、Cは「半分、自分で解決し、半分は親に解決してもらった。1人で結論を出すの間違いかもしれないので」と述べ、親に背中を押してもらったようである。

家族の反応としては、Aは「始めは良い顔をしなかったが、結局、自分のことだから、自分で決めなさいと言われた。大学で何か1つは資格を取るよう言われた」、Bは「母は悔いがなければいいじゃないと言った。父が免許だけでもとやってうるさかった。まだ、引きずっている。時々、不機嫌になる」、Cは「不安なことを話したら、辞める方へ背中を押してくれた」と述べている。Bの父親以外の家族は、進路変更を受け入れて認めてくれている。

### (6) 進路変更後

進路変更後について、Aは「時間に余裕ができた。楽になった」、Bは「軽くなった。背負っていたものがこんなに重かったのかと思った。自分で自分を追い込んでいた気がする。ほっとした。あのまま続けていたら、大学をやめたかもしれない」、Cは「気持ちに余裕ができた」とそれぞれゆとりができて安堵したようであり、気持ちが楽になったと述べている。

大学生活について、Aは「ボランティア活動をして充実している」、Cは「授業も減って生活もだらっとしている。のんびりしている。バイトが充実している。バイト先でいろいろな子どもと遊ぶのが楽しい」と述べ、それぞれ別の道で大学生活を楽しんでいる。Bは「授業が減ったので、大学にあまり来なくなった。家にいることが多い。バイトはしている。何をしたら良

いかな分からない。何もしないうちに過ぎていく」と戸惑いを述べている。

今までともに養護教諭を目指してきた友人との関係については、Aは「授業が違うので、会わなくなった。しかし、会えば、しゃべる。もともと、そんなに近いわけではない。変わらない」、Bは「養護の子と合わなくなった。仲の良い子も辞めたので、友人関係は変わっていない」、Cは「心理の授業を取るようになり、心理の子と話すようになった。養護の子とは前から仲が良かった子は話す、話すことがなくなった」と述べている。基本的な友人関係は続いているものの、会う機会が減り、目指す方向性が異なってきたため、仲間意識は薄らいでいるようだ。

養護教諭を志望しなくなっても、養護教諭のイメージは、3名とも変わらないと言う。また、大学生活の満足度は変化がないと言うが、アルバイトやボランティア活動等大学以外の生活の充実度が影響しているようだ。

(7) 新たな進路について

3名とも新たな進路を模索中のようなのである。Aは「保育士の勉強はしている。来年の4月に試験を受ける。今まで学んだことがすべて生きていく。医療事務の資格も取るつもり。辞める時、お母さんが大学でひとつは資格を取って欲しいと言ったから」と述べている。資格取得に意欲的ではあるが、どちらを選択するかは決めかねている。

Bは「一応、就きたい職業の資格があって、資格は取った。ただ、これで良いのかなと思う。他にもあるのではないかと。就職課でバイトをやってみたらと言われてる。これで決めていいのかなと思う」と進路を模索していることを語った。

Cは「子どもと関わる仕事がしたい。障害のある人の支援もできるようになりたい。どうしようかは悩む。アルバイトにするか正社員になるか。保育士の資格を取るか」と進路に悩んでいることを語った。しかし、「前は一直線しか見ていなかった。迷いを捨てていた。今は迷いがある。迷う余裕ができた」と迷うことの肯定的な面を述べている。

5 考察

3名のインタビューから、進路変更のプロセスは①目標へのコミットメント（傾倒）、②悩み、③限界、④諦め、⑤進路変更の決断、⑥新たな進路の模索、⑦新たな進路の決定と考えられる。ただ、3名とも新たな進路決定には至っていない状況にあるので、ここでは、進路変更の模索までについてアイデンティティの側面と適応性の側面から検討したい。

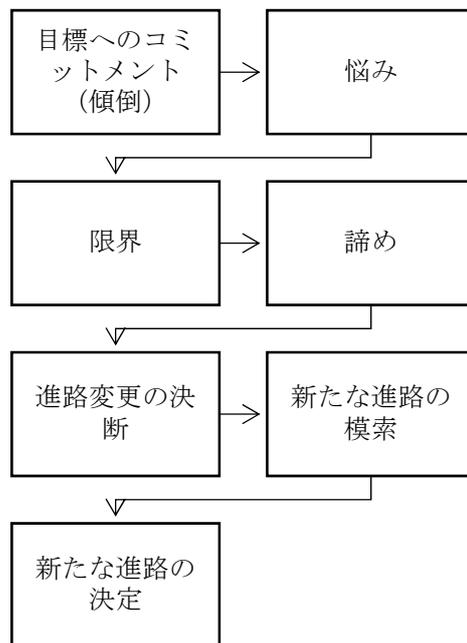


図1 進路変更のプロセス

(1) 目標へのコミットメント（傾倒）

大学入学時から2年間、3名とも養護教諭を目指して努力をしており、目標へコミットメント（傾倒）していたと考えられる。Cが「進路変更前は一直線しか見ていなかった。迷いを捨てていた」と言うように、迷うことなく、養護教諭を目指していた時期があったと考えられる。

Marcia, J.E. のアイデンティティ・ステータスの研究によれば、目標にコミットメントしているのは、いくつかの可能性を吟味し、自分自身で解決に達して、それに基づいて行動しているアイデンティティ達成型と親の目標を迷わずに受け入れて自分の目標とし、危機を経験していない早期完了型である<sup>7)</sup>。本学の養護教諭志望の学生に関する研究で、小、中学生で進路を決定し、自らの能力、適性を十分吟味したり、危機を経験することなく志望通り大学に入学した早期完了型の学生が多いことを示した<sup>8)</sup>。それに対して、3名は進路を高校生の時に決定しているし、AとCは他の進路も吟味している。ある程度、進路について考えたり、悩んだりしたことが伺える。その危機を経て養護教諭志望にコミットメントしているアイデンティティ達成型だったと考えられる。

(2) 悩み

3名ともに共通していた悩みは、養護教諭になるための過程が困難な道りであるという点にあった。養護教諭は学校現場で心身両面からのアプローチができ

る存在である。そのためには、精神面、身体面の両方に関して学ばなければならない。また、救急処置、健康診断を実施するためには、実技の練習も必要となる。3名が「大変だった」と言うように多くの課題に取り組まなければならない。

また、Aはボランティア活動を通して、子どもの命を任せられる責任の重さに気づき、自分には無理だと感じている。Cはアルバイトを通して、子どもと関わる上で自分自身に足りないものがあることに気づき、さらに教えることの難しさを痛感したことから、教師に向いていないのではないかと考えるようになった。

養護教諭の職務について学んだり、子どもと接する中で、Aは養護教諭の仕事との困難さに直面し、Cは自らの適性に直面し、アイデンティティが揺らいだと考えられる。Bはアイデンティティの揺らぎについては明確に述べていないが、「揺れている時期は辛かった」と揺らぎがあったことは述べている。

高校時代に進路を決定し、一見、アイデンティティを確立しているように見えるが、大学での学びや大学内外の経験を積んだりする中で、再度、養護教諭とは何かという問いや自分の適性、志望動機等に直面したと考えられる。その中でアイデンティティが揺らぎ、危機に陥ったと捉えることができる。

3名の志望理由を吟味すると、Aは「楽しかった母校の教員になりたい」、B、Cは「相談に乗ってもらった養護教諭に憧れて、その先生のようにになりたい」という思いが語られている。中学、高校時代の居心地の良い場所への回帰が大きな理由として挙がっており、自分が養護教諭に向いているか否かという検討はなされていない。Cは母親に養護教諭に向いていると言われていたが、自分では考えていない。

確かに、高校生の時期に適性を考えて進路を決定させることは困難なことは確かである。大学入学後の学びの中で再度、自分と直面し、適性や志望について考えることが求められであろう。つまり、アイデンティティの再確認が必要であり、時にはアイデンティティの再確立が必要になると言える。

### (3) 限界

限界を感じることは、それまでに精一杯努力を重ねてきたという経験が前提となるだろう。3名とも異口同音に養護教諭になることの限界を語っている。Aは「いっぱい、いっぱい、ついていくのに死にそうだった。寝ないでやらないとついていけなかった」、Bは「想像以上に大変だった。ついては行けたけど。2年後期に無理だと思った」、Cは「自分の頑張り限界ではないかと思った」と述べている。努力しなければ、限界を感じることはないであろう。Bは「やり切

った」という達成感さえ述べている。

限界を考える上で、菅沼の〈諦めたきっかけ〉の分類が有効である。菅沼は「失敗可能性の認識」、「達成困難の認識」、「実現不可能の認識」と分類している。

「失敗可能性の認識」は今後努力を続けても当該の目標の達成に失敗する可能性があることの認識、「達成困難の認識」は現状では当該の目標の達成が困難であるとの認識、「実現不可能の認識」は自分の努力とは関係なく、当該の目標の実現が絶対不可能であるという認識である。この3概念は時間的経過と目標達成・実現困難度の認識が伴うと言う<sup>9)</sup>。限界は「実現不可能の認識」を得たと捉えることができる。そこに至る過程は、3名は「失敗可能性の認識」、「達成困難の認識」を経て実現不能の認識に至ったと考えられる。

努力をしても目標に達することが不可能であるという限界を感じることは、どのように対処して良いか分からなくなっていると捉えることができる。浅野は、わりきり志向尺度の因子として「わりきりの有効性認知」と「対処の限界性認知」を抽出し、前者は抑うつを阻害し、人生における満足感を高めるが後者は、葛藤状態の維持による抑うつ症状の長期化や人生における満足感の低下といったネガティブな心理的影響を及ぼす可能性があるとして述べている<sup>10)</sup>。3名が限界を感じた時、Aは「自信をなくした」、Bは「揺れている時期は本当に辛かった」、Cは「養護教諭になれるのかと思うと、一気に不安になった」と述べている。このことから、ネガティブな感情を抱いていたと考えられる。

そのような状況の中で3名は友人には相談し、Aはチューター、Bは学生相談の先生、Cは母親に相談している。しかし、担当教員に自発的に相談できなかったと述べている。

学生の援助要請行動に関する研究では、悩みがあっても相談しない学生の特徴として相談への抵抗感、自尊感情の低さが関連していることが示唆された。自尊感情の低い人は自己評価を守ることには力を注ぐ。そのため、「相談すると、相手から見下されるのではないかと。相手に見下されたショックで傷つくのが怖い」という恐れから回避的行動を取ることがある<sup>11)</sup>。3名は養護教諭志望学生としての評価下がることやそれによって傷つくことを恐れて担当教員への相談を避けたのではないだろうか。限界を感じながらも、養護教諭になりたいという思いがあり、担当教員に認められたという気持ちや養護教諭を目指す他の学生と比較されて見下されるのではないかと懸念を抱いていたと考えられる。

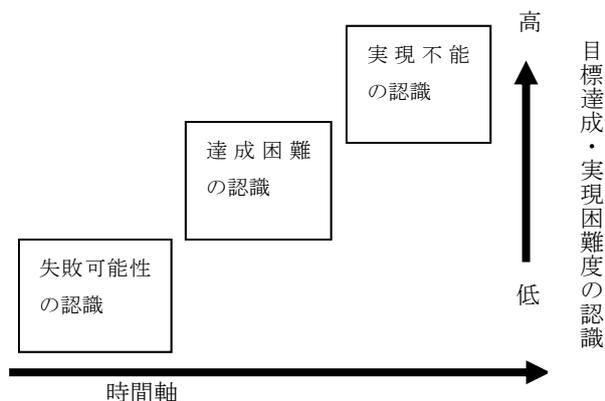


図2 諦めたきっかけによる概念間関係図  
(菅沼2013)

#### (4) 諦め

目標を断念することは目標を諦めることである。目標を達成するように努力することは肯定的に評価されるが、目標を諦めることは、否定的に評価される傾向がある。3名も現実には目標を諦めているが、「養護教諭になることを諦めた」という表現は一切しなかったが、このような心理が働き、諦めたことを認めたくなかったからではないだろうか。

しかし、目標達成が不可能な場合、見果てぬ夢を追い続けたり、無謀な挑戦を繰り返したりすることは、肯定的とは言えないだろう。このような場合、諦めることは精神的健康を保つための一つの方略と考えられる。Wrosch等は、目標達成が不可能な場合、目標を諦めることによって失敗をくり返さない、心理的苦痛を和らげるといった利点があるとしている。さらに、目標の断念 (goal disengagement) と、目標への再挑戦 (goal reengagement) が適応的な自己制御において重要であると主張している<sup>12)</sup>。

一方、目標達成が不可能な場合も、目標断念が否定的に働くことがあるという研究結果もある。竹中は、目標断念は主観的幸福度の低さに関連することを指摘している<sup>13)</sup>。このように、諦めに関しては肯定的、否定的側面が見いだされている。適応や精神的な健康等肯定的な面が生じるかどうかは、Wrosch等が指摘するように、目標への再挑戦ができるかどうかにかかわるのではないだろうか。このことに関しては、後述する。

#### (5) 進路変更の決断

紆余曲折を経て、3名は養護教諭を志望することを辞める決断をした。その時期は2年生の後期から3年生の開始前までである。山崎の大学生の進路変更に関する研究によれば、進路変更の出現度は「なりたいた

の」を考えた時期から大学へ入学するまでの時期が最も高く、次いで専門課程に進学してから、就職活動大学院進学準備等をはじめまで (大学2年後期～大学3年2月) の時期が高い結果になったと言う。前者は入学した大学、学部により、新たな志望を見出したり、視野が広がり別の志望を見出した結果ととらえ、後者の理由として希望する学科に行けなかったことや、専門課程での生活が自分の期待していたものとは違っていたことをあげて、今までの選択を放棄して別の志望を選択する者が多いことを示した<sup>13)</sup>。

本学の教職課程では2年生から本格的に養護の専門科目や教職の科目を学ぶようになる。3名も専門的な勉強をする中で進路変更を考えるようになったのであろう。また、養護実習は4年時に実施されるが、3年生の時期に実習校の決定が求められるし、臨床実習が実施される。森下は教育実習を体験した学生が教職を諦めるプロセスについて言及している<sup>14)</sup>。学生にとっては、実習を通して教員の職務の実際を体験した上で、自分の教員としての資質を確認して教員への志望動機を確固たるものにすることが望ましいと考えられる。しかし、教育委員会は「教員となる明確な意志を有していること」を実習の要件としている。現状では3年生の時点で教員になる意志の有無が問われることになる。そのため、この時点で進路を変更する学生が出現する傾向にある。

決断を下すことは、自らの責任を伴うことになり、勇気のいる行為である。しかし、アイデンティティの獲得のためには、何らかの決断を下さなければならない。決断を下す責任を回避したり、先延ばしにしたりすると、アイデンティティ拡散の事態に陥ることもある<sup>15)</sup>。A、Bは自ら決断し、Cは親の後ろ盾を得てはいるが、自ら決断している。決断することで、3名ともアイデンティティの危機に陥らずに次のステップへと進むことができたと考えられる。

決断後、3名は養護教諭へのコミットメントを辞めて養護教諭になるための努力をしなくなった。その結果、時間的、精神的なゆとりを得て「気持ち楽になる」体験をしていた。目標を諦めて変更することで、ストレスや心理的苦痛から解放されたと考えられる。

また、時間的余裕により「迷う余裕」ができたことは、モラトリアムの時期を得たと考えられる。自分自身を見つめて、将来について考えるモラトリアムの時期が、アイデンティティの確立のためには必要である。

大学生生活の満足度は変化がなく、進路の変更により、友人関係には多少の影響があったようだが、問題視していない。さらに、アルバイトやボランティア活動等大学以外の生活も充実しているようだ。

### (6) 新たな進路の模索

進路変更をした場合、新たな目標が見いだせない  
と、心身の健康に影響が見られる。田中は目標をあきらめなければならない事態になった場合、新たな目標を設定できると考える方が、主観的幸福感が高いことを示唆している<sup>16)</sup>。また、安藤は保育科で進路変更をした短大生は保育職以外の進路を積極的に選択するというよりも、何らかの理由で保育職を断念した結果として他の進路を希望するという傾向にある。そのため、就職に対して動機づけられず、無力状態に陥ってしまう傾向にあると言う<sup>17)</sup>。

3名の学生は新たな進路を模索中で、進路を決定してはいないが、無力状態とは考えられなかった。新たな進路として、A、Cは「子どもに関わる仕事」を考え、そのための資格取得に向けて動いている。Bは医療関係の資格を取得している。新たな進路の方向性は養護教諭に関連があるものである。進路を変更しても、養護教諭のイメージは変化しておらず、肯定的なイメージを保っている。このことは、養護教諭を否定したり、拒否している訳ではないことを示している。関連性のある職種を志向していることも養護教諭志向性を保っているからと考えられる。また、新しい進路に関して「今までの学んだことを生かすことができる」と述べている。このように、養護教諭を目指す選択をして学んだことを肯定的にとらえられることも、心理的安定につながっているのではないだろうか。

まだ、進路が確定していない段階であり、不安も抱いているようであるが、新たな目標を目指す動機づけはなされていると考えられる。単に目標を断念したのではなく、新たな目標を再設定できたこととらえることができる。

3名とも進路変更後の方が、表情が明るくなり、生き生きとして楽しそうな様子である。インタビュー時も自信を持って答えてくれた。大学生生活が充実していること、進路変更で悩み、それを乗り越えるという経験を通して成長したことが伺えた。

### まとめ

学生のインタビューから進路変更のプロセスは①目標へのコミットメント（傾倒）、②悩み、③限界、④諦め、⑤進路変更の決断、⑥新たな進路の模索、⑦新たな進路の決定と考えられる。このプロセスは、大学生においてアイデンティティの確認及び再確立と捉えることもできる。また、適応的な方略として考えられる。

学生が悩み、自己決定すること、新たな進路を選択することが、アイデンティティの再確立にとって重要なテーマになると考えられる。担当教員は学生に寄り

添いながら、学生が自己決定できるよう援助をすることが必要である。特に自発的な援助要請行動を取ることが難しいため、面接を設定して学生の話聴くことが求められるだろう。現在もこのような支援を行っているが、今回の研究から学生が悩む時期、進路変更を考える時期が2年生であることが明確になったので、介入が必要な時期に効果的に面接を設定することが可能になった。

また、適応の面から考えると、諦める過程を支え、目標への再挑戦、再設定への援助が重要となる。新たな進路決定に向けて、情報の提供やキャリア指導室との連携が必要である。

今回のインタビューの協力者は質問に対して真摯に答えてくれた。今までのインタビュアーとの信頼関係があったからであろう。しかし、インタビュアーが担当教員であったために、配慮した面があった可能性も否めない。研究のためには第三者によるインタビューが必要かもしれない。

また、目標へのコミットメントし、努力をしていたが、学生の中にはコミットメントできなかつたり、努力を怠ったりする者もいる。その場合、目標を放棄するという形での進路変更になる可能性が高く、無気力に陥ったり、退学に至ることもある。そのような学生の進路変更のプロセスや支援に関する研究が今後の課題である。

### 謝辞

本研究は3名の学生の真摯な質問応答を得て遂行された。本テーマについて理解し、インタビューに快く応じてくれた学生に著者一同深謝するものである。

### 文献

- 1) 中林恭子・後藤和史 (2015) : 本学の学生の援助要請行動について 瀬木学園紀要, 9, 83-87
- 2) 山崎篤 (1991) : 大学生の進路変更に関する一研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 469-470
- 3) 安藤史高 (2007) : 保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響 一宮女子短期大学紀要, 46, 76,
- 4) 請川滋大・晴山紫恵子・林亨 (2000) : 短期大学生の進路希望に関する縦断調査 (1) 一初等教育学専攻女子学生の進路変更の契機— 北海道女子大学短期大学部研究紀要38, 223-232
- 5) 森下覚 (2012) : 教育実習生の教職を「目指すプロセス」と「諦めるプロセス」日本教育心理学会総会発表論文集 (54), 329
- 6) 大谷 尚子・堀江 宮子 (1985) : 養護教諭志望学

生の養護教諭志向に関する研究--養護教諭課程への志望動機と在学中の志向の変容について 茨城大学教育学部紀要 教育科学 (34), 213-229

7) Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551-558.

1998 鱈 幹八郎 (編) 「アイデンティティ・ステイタス」の開発と確定 アイデンティティ研究の展望 5-1 ナカニシヤ出版

8) 中林恭子・後藤和史・後藤多知子 (2011) : 養護教諭を志望する学生のアイデンティティと特徴 第58回日本学校保健学会発表

9) 菅沼慎一郎 (2007) : 青年期における「諦める」ことの定義と構造に関する研究 教育心理学研究 61, 270-271

10) 浅野憲一 (2010) : わりきり志向尺度の作成および精神的健康, 反応スタイルとの関係 パーソナリティ研究, 18-2, 113-114

11) 中林恭子・後藤和史 (2015) : 被援助志向性と自尊心が大学生の援助要請行動抑制理由に与える影響, 第62回日本学校保健学会発表

12) Wrosch, C., Scheier, M. F., Carver, C. S., & Schulz, R. (2003) : The importance of goal disengagement in adaptive selfregulation : When giving up is beneficial. *Self and Identity*, 2, 1-20.

13) 山崎篤 (1991) : 大学生の進路変更に関する一研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 469-470

14) 前掲6) と同じ

15) Erikson, E. H.: *Psychological Issues Identity And The Life Cycle, International Universities Press, Inc. 1959* (邦訳 小此木啓吾訳編 (1973) : 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 115

16) 田中知恵 (2006) : 目標設定と主観的幸福感に関する検討, 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 15, 40-41

17) 前掲3) と同じ